

「冬物語」における同一性のパラドクス

柴 田 正 樹

(高知大学専任講師)

The Paradox of Identity in *The Winter's Tale*

Shibata Masaki

シェイクスピアの「冬物語」はボヘミアとシシリアを舞台とし、両国国王の厚い友情のことから語り始められる。両者は幼いころ一緒に教育を受け、それぞれの国の主として別れざるを得なくなつてからも、手紙や使節を送り合い、友情を深めてきた。今、ボヘミアの王ポリクシニーズはシシリアに遊ぶこと十ヶ月、帰国を決意するが、リオンティーズはそれをさらに引き延ばそうとする。二人の絆の強さ・一体性は、冒頭においてはなほだ強調されるのだが、両者の関係には同時に差異性が見られるということにも気を付けなければならない。アーキデーマスは

If you shall chance, Camillo, to visit Bohemia, on the like occasion whereon my services are now on foot, you shall see, as I have said, difference betwixt our Bohemia and your Sicilia.¹ (I. i. 1-4)

と言う。‘Bohemia’、‘Sicillia’という言葉がこの劇においてそれぞれの国の王を指すのにも使われていることを考えれば、この台詞から「両国の風習等は随分異なっている」という意味だけでなく、「二人の王の間には大きな違いがある」という暗示的な意味を読み取ることも可能ではないだろうか。

一体でありつつ差異を持つという奇妙な二人の関係はポリクシニーズの台詞

We were as twinn'd lambs that did frisk i' th' sun,
And bleat the one at th' other. (I. ii. 67-68)

の中の「双子」という表現にもみられるだろう。双子とは二人でありながら一人、また逆に一つのものから生まれた二つのもの、というパラドキシカルな関係を表すからである。カミローは、

They were trained together in thier childhoods, and there rooted betwixt them then such an affection which cannot choose but branch now. (I. i. 22-24)

と、二人の心を一本の木から生え分かれた二本の枝に喩えているが、これも同じことを言い表している。二人は一本の木、即ち一体なるものなのか、それとも二本の枝、つまり二つの異なるものなのか。カミローの次の言葉はこの不可思議な関係をさらに際立たせる。

Since thier more mature digities and royal necessities made separation of their society,

thier encounters, though not personal, have been royally attorneyed with interchange of gifts, letters, loving embassies, that they have seemed to be together, though absent; shook hands, as over a vast; and embraced, as it were, from the ends of opposed winds. (I. i. 24-31)

別れて生活するようになってからも交流を絶やさぬ二人は、一方がいなくても一緒にいるかのようにみえる。つまり一方は他方に内在しているようなもので、両者は距離を置くことなく完全に一体化している。しかし二人は同時に異なる二人の人間であって、「大海を隔てて」とか「方向を逆にする風の両極」という表現に見られるように、決定的に離れた位置に立っていてもいるのだ。一方は他方の内部にまさに同一なるものとして存在しつつ、且つ同一ならざるものとしてある。双子のような国王たちの一体性とはこのようなものだ。同一なるものは純粋な同一性においてあるのではなく、内的にずれていて、非同一なるものを抱え込んでいるのだと言ってもいいだろう。

双子の同一性は内的なずれを持っている。「冬物語」においてこのずれの位置に常に女性が配置されることは注目に値する。「我々は双子のやぎのようだった」という先の言葉に続けてポリクシニーズはリオンティーズの妻ハーマイオニに、子供時代の彼らは無邪気で原罪とも無縁で、この状態が永遠に続くものと思っていたと言う。それを受けて彼女が「その後、道を外されたのですね」と言うと彼は

O my most sacred lady,

Temptations have since then been born to 's; for
In those unfledg'd days was my wife a girl;
Your precious self had then not cross'd the eyes
Of my young play-fellow. (I. i.i. 76-80)

と返答する。無邪気だった時代が妻の出現によって終わるとは、女性との出会いをきっかけに、双子のような二人の間にずれ、つまり二人が別々の存在であるという事実が顕になっていったということだろう。もちろん二人の親交は続くのだから女性が彼らを分離させたというわけではない。しかし女性は分離の位置、ずれの位置に立っているのである。

ずれは同一なるものと同一ならざるものの差異を明らかにする分離の位置だが、しかしそれは同時に、両者を同一なるものの中につなぎ止める接合の位置でもある。リオンティーズはポリクシニーズの滞在を延ばそうと説得するが、相手の気持ちは変わらない。それを変えさせたのは実はハーマイオニだった。リオンティーズは彼女の説得が功を奏したことを喜び、これほど上手に彼女が口をきいたのはある一度の機会を除いてかつてなかったと言う。その一度の機会とはリオンティーズの求愛を受け止めたときであったと聞かされて、彼女は

I have spoke to th' purpose twice:

The one, for ever earn'd a royal husband ;
Th' other, for some while a friend. (I. ii. 106-108)

と叫ぶ。一方で夫をつなぎ止め、他方で夫の分身であるポリクシニーズをつなぎ止める。彼女は分離と接合を兼ねる微妙な位置に立っているのである。

さて、王たちの分身関係において見られる同一性とその内部のずれは、父と子という関係におい

でもみられる。子は父の分身であり、「冬物語」においては両者の同一性は幾度となく強調される。宮廷の人はリオンティーズと息子のマミリアスはそっくりであると噂するし、リオンティーズ自身、息子のことを 'my collop' (I. ii. 137) と呼ぶ。ポーリーナは

Behold, my lords,

Although the print be little, the whole matter
And copy of the father: eye, nose, lip;
The trick of 's frown; his forehead; nay, the valley,
The pretty dimples of his chin and cheek; his smiles;
The very mould and frame of hand, nail, finger.
(II. iii. 97-102)

と、リオンティーズの娘パーディタの中に父そのものが存在していると雄弁に語る。またリオンティーズはフロリゼルがその父ポリクシニーズにあまりにそっくりなので、彼がポリクシニーズ本人であるかのように昔話がしたくなる。父と子は一瞬目まいがするほど同一なるものとして語られるのだ。しかしそれと同時に子は父と別個の存在であり、父に取ってかわられない、あるいは父の中に吸収され得ないものあであることは言うまでもない。父にとって子は同一にして同一ならざるものであり、ここでも同一性はずれているのである。²

子は父に同化も回帰もしないという点で父とは非同一なるものだ。その意味で子は父の同一性を揺るがすものと言える。とすれば、同一性の内部に非同一性としての子を生むずれば、同一性を脅かし、父の権威を失墜させる可能性と見做すこともできるだろう。事実父と子の同一性を阻み、同一性の純粹さを汚すもの³、それがずれであり、そしてこのずれは、先に述べたように、女性によって占められる位置である。妻ハーマイオニがポリクシニーズと密通していると思いだりリオンティーズは彼女から息子のマミリアスを取り上げ、こう言う。

Though he does bear some signs of me, yet you
Have too much blood in him. (II. i. 57-58)

妻は父と子の血の繋がりに混ざり込むもの、いや、それどころか、リオンティーズの目から見れば、密通によって父と子の同一性を不可能にするもの、早い話が私生児の可能性として捉えられている。この可能性から父という同一者は逃れることができない。リオンティーズは「女の腹を守る棚などない」(I. ii. 204) と言う。しかし妻は父にとって子を可能にする存在である。妻がいなければ子は生じないし、父と子の同一性もあり得ない。つまりずれこそ、父を脅かす私生児の可能性こそ父と子の同一性の関係を可能にする条件であるはずだ。リオンティーズとポリクシニーズの関係においても、ハーマイオニこそポリクシニーズの説得に成功し、両者をつなぐのである。分離と接合の位置に立つ妻はずれとは言えないずれであり、汚点を付けることのない染みなのだとと言えるだろう。

リオンティーズの悲劇は、それまで意識していなかった同一性内部のずれと非同一性の存在に気付き、それを汚染するもの、同一性を脅かすものとして排除するところに生じたと考えられる。

There may be in the cup
A spider steep'd, and one may drink, depart,
And yet partake no venom (for his knowledge

Is not infected) ; but if one present
 Th' abhorr'd ingredient to his eye, make known
 How he hath drunk, he cracks his gorge, his sides,
 With violent hefts. I have drunk, and seen the spider.

(II. i. 39-45)

リオンティーズは優れた自己分析を行っている。いかしここでクモと表現されたずれが、ずれとは言えないものなのだとすれば、彼のこの状態は錯乱としか言いようのないものだろう。彼は二つの分身関係における共通のずれである妻、そして非同一なるものであるポリクシニーズと、私生児と彼が思い込んだパーディタを殺害しようとする。彼はもはや同一性しか認めない。それ以外は己の敵として全てを抹殺しようとする。下臣に対しても

Our prerogative

Calls not your counsels, but our natural goodness
 Imparts this; which if you, or stupefied,
 Or seeming so, in skill, cannot or will not
 Relish a truth, like us, inform yourselves
 We need no more of your advice: the matter,
 The loss, the gain, the ord'ring on 't, is all
 Properly ours. (II. i. 163-170)

という言葉に見られるように、己に異を唱えることを許さない。彼はポーリーナが激しく非難するように「暴君」と化する。

I'll not call you tyrant;

But this most cruel usage of your queen—
 Not able to produce more accusation
 Than your own weak-hing'd fancy—something savours
 Of tyranny. (II. iii. 115-119)

暴君とは己=同一なるもの以外、何者も認めない者のことである。

しかしすでに述べたように、ずれや非同一性はまさに同一なるものなのだ。ハーマイオニは裁判の席で自分はいくまで夫に従順であったと悲痛な声で主張する。

For Polixenes,

With whom I am accus'd, I do confess
 I lov'd him as in honour he requir'd
 With suth a kind of love as might become
 A lady like me; with a love, even such,
 So, and no other, as yourself commanded:
 Which, not to have done, I think had been in me
 Both disobedience and ingratitude

To you, and toward your friend (III. ii. 61-69)

即ち彼女は同一者＝リオンティーズと全く一体だった。だとすれば妻や友人や娘に暴力を振うリオンティーズは実は己に対して暴力を働いていたということになるだろう。事実彼の暴力行為は全て自分に跳ね返ってくる。

ずれを否定するとは、まず第一に、同一なるもののずれとして存在する子を否定することである。リオンティーズが「ハーマイオニは貞節なり」というアポロの神託を否定し、妻の有罪を決めつけると、間髪を入れず息子の死が報じられるのはこのためである。彼はパーディタのみならず、知らず知らずのうちに実の子供と分かっているマミリアスさえ否定していた。第二に、同一なるもののずれを否定するとは生成・変化の否定を意味するだろう。これは時間の否定と言ってもいい。4幕1場でコーラスとして登場する「時」が

. . . it is in my power

To o'erthrow law, and in one self-born hour
To plant and o'erwhelm custom. (IV. i. 7-9)

と言うように、生成・変化は時間が司るものだからである。リオンティーズは子供と妻の死に直面し、自分の愚かしさに気付く3幕で一旦舞台を退き、再び5幕で姿を現すが、その間16年が経過しているはずなのに、彼の周囲は重苦しい雰囲気がたれこめたまま、何ら変化は見られない。妻を否定した瞬間から明かに時間は停止し、動きというものは一切奪われているのである。第三に、ずれを否定した帰結として、孤独が彼を襲う。同一ならざるものを抹殺するとは、他者の存在を認めないということに他ならない。カミローの言葉を借りれば「自分自身に対して反乱を起こした」(I. ii. 355) リオンティーズは、かくして孤独と不毛の世界に閉ざされてしまうのである。「時」はこのことに関して

Th' effects of his fond jealousies so grieving
That he shuts up himself (IV. i. 18-19)

と言っている。

リオンティーズは自分で招いたこの事態を 'issueless' と形容している。例えばポリクシニーズに対する自分の罪を悔いながら彼はフロリゼルにこう語る。

You have a holy father

A graceful gentleman; against whose person
(So sacred as it is) I have done sin,
For which, the heavens (taking angry note)
Have left me issueless. (V. i. 169-173)

これは重層的な意味を帯びた言葉だ。単に「子供がない」というだけでなく、「何も生じない」という停滞と不毛、さらに「出口がない」という閉塞的な状況を表すからである。そして劇の後半の焦点は、彼がいかにこの失われた 'issue' を回復するかという点にある。興味深いのはアポロの神託がこの点に関して次のように答えていることだ。

... the king shall live without an heir, if that which is lost be not found. (III. ii. 134-136)

世継ぎ、即ち 'issue' を取り戻すためには、失われたものを再び見いださねばならない。失われたものとは、無論、彼が部下に命じて捨てさせ、母によってまさしく「失われた者」という意味の名を与えられたパーディタのことである。彼女を取り返すことこそリオンティーズの課題だと神託は言う。事実、パーディタの姿は彼が失った生成・変化、つまり動き、そして時間の姿そのものと言っていい。例えばフロリゼルは恋人である彼女をこう表現している。

What you do,
Still betters what is done. When you speak, sweet,
I'd have you do it ever: when you sing,
I'd have you buy and sell so, so give alms,
Pray so, and, for the ord'ring your affairs,
To sing them too: when you do dance, I wish you
A wave o' th' sea, that you might ever do
Nothing but that, move still, still so,
And own no other function. Each your doing,
So singular in each particular,
Crowns what you are doing, in the present deeds,
That all your acts are queens. (IV. iv. 135-146)

彼女の行為は成されたことをさらに素晴らしく見せると彼は言い、その歌う様を絶えず動き続ける波に喩える。彼女の動きは一つの行為として結晶化するのではなく、それを越えてさらに動き続ける。彼女は動的な状態そのものとして提示されているのである。また、祭りに集う人々に季節の花を差し出しながら彼女が語る言葉はいずれも時の移り変わりを強烈に感じさせる。彼女は動きであり、時の移り変わりを促す者なのだ。彼女はずれの作用を一身に体現している。

実際、彼女はずれの位置にも立っている。ポリクシニーズは息子が彼女に心を奪われ、王となるための鍛練を怠っていることに危惧を覚える。つまりパーディタも父と子の同一性の関係にずれを生じさせ、同一者である父に危険感を抱かせるものなのだ。また、フロリゼルが父である自分の意向を無視して彼女と結婚しようとする、ポリクシニーズは両者の存在を死をもって脅かす、という場面にみられるように、ここでも同一ならざるものは同一なるものの排除の対象としてある。パーディタは

... even now I tremble
To think your father, by some accident
Should pass this way, as you did : O the Fates!
How would he look, to see his work, so noble,
Vilely bound up? What would he say? Or how
Should I, in these my borrowed flaunts, behold
The sternness of his presence? (IV. iv. 18-24)

というように、幾度か父なるものに対する恐れを語っているが、それは同一ならざるものが同一なるものの暴力に対して抱く恐れなのではないだろうか。

しかしパーディタはハーマイオニと同じ運命を辿るわけではない。後者は夫から迫害をうけたが、パーディタは未来の夫フロリゼルによって庇護され、あまつさえ賞揚されさえする。劇の前半は同一者による非同業者、さらにずれを生む女性の排除の過程が描かれていたのだが、後半においては、同一なるものと同一ならざるものとの、対立的でも暴力的でもない関係の可能性が追求されているのである。リオンテーズが 'issue' を回復する可能性もここにおいて探られている。そしてそのような可能性の場として示されているのが祝祭とエロスの場である。祭りにおいては同一なるものとずれ・同一ならざるものとの立場は逆転する。例えばパーディタは女神のごとく着飾り、それに反してフロリゼルは田舎者の格好をしているというように。またパーディタの養父である羊飼いとすると、祭りは女性が主役となる場だ。

Fie, daughter! when my old wife liv'd, upon
 This day she was both pantler, butler, cook,
 Both dame and servant; welcom'd all, serv'd all;
 Would sing her song and dance her turn; now here
 At upper end o' th' table, now i' th' middle;
 On his shoulder, and his; her face o' fire
 With labor, and the thing she took to quench it
 She would to each one sip. You are retired,
 As if you were a feasted one, and not
 The hostess of the meeting

 Come, quench your blushes, and present yourself
 That which you are, Mistress o' th' Feast. (IV. iv. 55-68)

と彼は力強く呼びかける。こうして祭りにおいて、父なるものは女性なるものに場を譲るのである。さらにエロスという状況がこの逆転の効果を強めているだろう。恋の状況をフロリゼルはこんなふうに説明している。

The gods themselves,
 Humbling thier deities to love, have taken
 The shapes of beasts upon them : Jupiter
 Became a bull, and bellow'd; the green Neptune
 A ram, and bleated; and the fire-rob'd god,
 Golden Apollo, a poor humble swain,
 As I seem now. (IV. iv. 25-31)

神々すら恋のためにその威信をかなぐり捨てる。エロスとはそのような同一者の自己卑下を生む状況なのである。そしてこうした状態にフロリゼル自身が陥っていることは言うまでもない。さらに彼はこうも言う。

... I cannot be
 Mine own, nor anything to any, if
 I be not thine. (IV. iv. 43-45)

パーディタ、即ちずれと一体でなければ、自分は自分として存在しない。このように祝祭、エロスとは同一なるものが非同一なるものに対して身を低くし、その不可欠さを承認する場なのである。同一化の力をずらすもの、つまり原理的に相対立するものを、自分にとって掛け替えのないものとして承認する。即ち同一性は自己否定するのである。しかしこのことは同一なるものの破壊を意味するわけではない。確かにずれば、父を脅かす私生児の可能性であり、秩序を破壊し、ともすればカオスを生み出しかねない力だ。けれどもずれの力を体現するパーディタはそのような破壊的な側面・私生児性を否定している。

... the fairest flowers o' th' season
 Are our carnations and streak'd gillyvors,
 Which some call nature's bastards: of that kind
 Our rustic garden's barren; and I care not
 To get slips of them. (IV. iv. 81-85)

この破壊力な力の否定はオートリカスの扱いにも現れているだろう。実は、彼はずれのカオス的な力の所有者と見ることができる。その名の由来である神話上の人物オートリカスはヘルメスの子で、その姿を自在に変えることができ、また巧みに物を盗んだ。「冬物語」のオートリカスも変装と盗みの名人であり、つまり彼らはいずれも自己同一性を持たず、秩序を攪乱するのである。彼は一面パーディタと似たところがある。宮廷から追い出され、時の歌を歌い、祭りの場において生き生きとする。しかし彼はずれの力の墜落した形態に過ぎない。彼は最後には羊飼親子に散々馬鹿にされ、自分の行いを悔い改めることを誓わされる。「冬物語」においては彼が表すようなカオス的な力は否定されているのである。

エロスの場においては同一なるもののみならず、ずれも自己否定する。先の引用におけるパーディタの言葉は、その宣言と読むことができる。しかしここで彼女がこんなふうに釘をさしていることも見逃すことはできない。ポリクシニーズが、カーネーションや縞石竹にartが加わっていると言っても、artはnatureに支配されているのだから、これらの花を私生児扱いするのは不当であると言うと、パーディタは次のように答える。

I'll not put
 The dibble in earth to set one slip of them [gillyvors]:
 No more than, were I painted, I would wish
 This youth should say 'twere well, and only therefore
 Desire to breed by me. (IV. iv. 99-103)

彼女は好き勝つてに植物をかけ合すことを否定し、自分がそのような対象として見られることを否定する。この時彼女は、自分が男性の意のままになるような、男性の意志と同一化した存在ではないということを、つまり同一なるものの権能の及ばない、同一化し得ない何物かであることを承認してもらおうと訴えているのではないだろうか。

これは第五幕のポーリーナとリオンティーズのやりとりを思い出させる。世継ぎがないと国政は乱れると、王に再婚を勧める側近の言葉を聞き、ポーリーナは、ハーマイオニが王にとって比類無き存在であることを自覚させ、再婚を否定させる。彼女はハーマイオニが死んでしまっているからといって、誰か別な人と道具のように取り替えが利くような存在ではないということ、リオンティーズが決して自由に処理できるような存在ではないということを確認させるのである。ポーリーナがハーマイオニを隠すことで、彼女の死は王にとって取り返しの利かない過去と化す。どんなに悔やんでも、王は彼女の死に対して何もできない。それは王に、ハーマイオニが絶対的な分離の位置にいることを自覚させるだろう。しかしだからと言って、彼女は彼とはもはや関係なく、無視したりどう扱ってもいいということにはならないとポーリーナは説く。それどころか、現在の王にとってすら唯一の、掛け替えのない存在として畏敬の念を求めているのである。ポーリーナはこのようにリオンティーズとハーマイオニを分かち、且つこの後、二人を結び合わせる。彼女は二人の関係におけるずれの役割を果たしているのである。

同一化、それは力でもって、あるいは認識・思惟を通して相手を規定すること、そうすることで相手を自らの体系内に取り込み、相手を掌握、支配、所有することだが、⁴ ポーリーナやハーマイオニはそのような同化を否定する。ハーマイオニやパーディタを同一性の支配を逃れるものとして認めること、また同一化し得ないからといって抹殺することもできないものであり、それどころか同一性にとって掛け替えのないものであることを認めること。これは先にいったように原理的には矛盾であり、本来有り得ないことなのかも知れない。しかしそれが可能になるのがエロスの場であり、祝祭の場なのである。そして同一なるものがずれ＝女性をそのようなものとして認識するとき、ずれ＝女性は私生児の可能性としてではなく、子という形で父＝同一者を更新するものとなり、豊饒の源となる。分離するものではなく、結び合わすものとなるのである。

リオンティーズが 'issue' を回復するのはまさにそのような認識に達したときだ。彼がポーリーナに再婚を断固否定した瞬間、パーディタがフロリゼルと共に宮廷に駆け込んでくる。そして彼らを迎える彼の言葉

Welcome hither,

As is the spring to th' earth! (V. i. 150-151)

に見られるように、彼は子供を迎え入れると同時に時間を回復する。妻の彫刻像が動き出すという最後の場面も、ポーリーナの

You perceive she stirs:

Start not; her actions shall be holy (V. iii. 103-104)

という台詞が表すように、リオンティーズがずれ＝妻＝動きを回復するということのドラマチックな表現なのである。

本来両立し得ないものが自己否定の下に豊かな一体者、内的なずれを帯びた一体者となる。同一なるものと同一ならざるものが結び合い、リオンティーズは子供や妻やポリクシニーズとの間に、幼かった頃のあの双子のやぎのような関係を回復するのである。しかしこのことは単なる無垢の時代への回帰を意味しない。幼い頃二人は自分たちの異質性に気が付くことなく一体性を保っていた。原理的には排除しあい、対立しあうもの同士であることを知らずにいた。劇の最後においてはリオンティーズは相手が、さらに妻＝ずれが、自分とは決して同化しないものであること、それどころか

自分を否定しさえするものであることを自覚している。その上で彼らと一体化しようとしているのだ。「冬物語」の結末は幸福な結末でありながら、その背後には幼い頃とは比べものにならないほど困難な生き方への決意があるはずである。

註

本稿は第29回シェイクスピア学会(1990年10月20日)において「同一性、非同一性、ずれ—『冬物語』試論」という題のもとに行った口頭発表に基づいている。

1. 引用は全て *The Arden Shakespeare: The Winter's Tale*, ed. H. P. Pafford (Methuen, 1963) による。
2. エマニュエル・レヴィナスは「父たること〔父性〕とは、他人でありながらしかも私であるような異邦人との関係である。自我と自我自身—とはいえ、私とは異質であるような自我自身—との関係である」(原田佳彦訳「時間と他者」法政大学出版局, 1986年, 94頁)と、他者性という観点から卓抜な父子関係の分析を行っている。筆者の時間、エロスに関する議論はレヴィナスに負うところが大きい。
3. 汚染のイメージに関しては Wolfgang Clemen, *The Development of Shakespear's Imagery* (London: Methuen, 1951; rpt. 1969) 196-198. 参照。
4. 柄谷行人は同一性や一般性に解消し得ないものを単独性と呼び、極めて興味深い議論を展開している。柄谷行人「探求I I」講談社, 1989年を参照。

(平成3年9月30日受理)

(平成3年12月27日発行)